

## 研究ノート

# 日本における恋愛研究の動向と課題

青 山 巧

### 1. 問題

#### はじめに

現在では恋愛について、LGBTなどの性の同一性や性交の対象の多様性や、マッチングアプリの台頭による出会いの形態の変化など、恋愛事情が多様化している。また、デートDVやストーカー問題など临床上で生じる問題についても関心が向けられている。

若尾(2014)は、日本性教育協会や内閣府が行った調査結果から「2000年代後半以降の若者の異性交際は、いずれの年代においても、異性交際を経験する年齢が遅い者や、そもそも異性交際を経験しない者が増加しているという現状が生じている」と述べている。しかし、未経験者の中には、恋愛経験をしたくてもできない者と、そもそも恋愛関係を必要としていない者が含まれている可能性があり、高坂(2011)は後者の「恋人を欲しいと思わない青年」について調査を行った。その結果、恋愛関係を必要ないと感じている青年が約2割存在することを明らかにした。

このように恋愛に関する状況や価値観が多様化している現代において、恋愛が持つ心理学的な意味を検討することは、ますます重要になってきたと言える。ただ、心理学において、恋愛を対象とした研究はそれほど多いわけではない。そうした問題意識を念頭に置きながら、心理学における恋愛研究の流れを概観することは、研究動向を明確にし、必要な未開拓分野を見出す上で重要である。また、少ないながらも、これ

まで恋愛研究をまとめる流れが何度かなされてきた(古畑, 1990; 松井, 1990; 立脇ら, 2005; 立脇・松井, 2014; 高坂, 2016)。そこで、本研究では近年の恋愛研究を概観し、その動向と課題について整理・検討を行う。

#### これまでの恋愛研究の動向

これまで恋愛研究を整理した研究については、古畑(1990)がアメリカと日本における心理学の概論書の改訂を概観した。古畑(1990)によると、アメリカにおいては1970年代から“対人魅力”に関する研究からはじまり、次第に“関係性”に関心が向けられるようになり、恋愛に関する研究が激増したと述べられている。日本の概論書においては、1970年代までには好意や魅力、愛などが取り上げられておらず、1980年代以降に社会心理学の分野で対人魅力について触れられるようになったと指摘されている。

1990年までの本邦における恋愛研究の動向については、松井(1990)が概観している。松井(1990)は「日本における恋愛研究は、青年心理学、社会心理学、家族心理学の3分野に大別される」と述べており、青年心理学と社会心理学に関する知見をまとめている。青年心理学の分野では、「恋愛の発達」「恋愛中の意識や感情」について手記分析をもとに、「性行動の発達」については調査データを中心に検討が行われてきた。社会心理学においては、対人魅力の研究を中心に「恋愛に対する態度や認知」「異性選択と社会的交換」「恋愛感情と意識」「恋愛の進

行と崩壊」の4つの分野に大別される。

そして、松井（1990）は恋愛研究の課題として、青年心理学に対しては理論の一般化の検証がされていないことを、社会心理学に対しては理論構築に至っていないことを、そして、それぞれの分野が互いの知見に触れず隔たりがあること指摘した。

古畑（1990）、松井（1990）以降の恋愛研究の動向については、立脇ら（2005）が1985年4月から2004年3月までに心理学系の学術誌6誌と5つの学会発表論文集に掲載された恋愛に関する論文217本（論文27本、大会発表論文190本）の検討を行った。その結果、「恋愛相手や恋愛関係に対する感情や評価」「恋愛や異性交際中の二者間で行われる行動」「恋愛特有の態度や認知」「恋愛と関連する要因」の4つのカテゴリーに分類されることを示した。また、調査期間を5年ごとの4期間に分け、各期間におけるテーマを検討した。第1期では、恋愛に対人魅力の知見を応用した論文が多く、第2期では恋愛特有の感情や行動に注目した論文が見られだした。第3期では、恋愛関係におけるコミュニケーションなど行動に着目する研究が増加し、第4期では、恋愛関係の形成から崩壊について、親子関係や友人関係などの他の対人関係との比較、対処行動を扱った論文などテーマに広がりが見られるようになった。さらに、課題として調査方法と対象者が質問紙調査と大学生を対象にした研究に偏っていることを指摘した。

立脇・松井（2014）は国立情報学研究所が運営する検索データベース「CiNii」で1980年以降の恋愛に関する研究260件を6つの領域（「恋愛・恋人の概念」、「恋愛中の感情と認知」、「恋愛中の行動と恋愛の進展」、「恋愛関係の崩壊」、「恋愛研究の広がり」、「恋愛以外のテーマからの展開」）に分けて概観した。そして、恋愛

研究の課題として、現象記述と一般理論の乖離、日本の恋愛研究の媒体の無さが知見の普及を妨げている可能性を指摘した。

高坂（2016）は2004年4月から2013年3月の期間において、心理学諸学会連合に加盟する当時50の学会における学会誌を対象に、恋愛研究の動向について調査を行った。その結果、31本の論文が検討対象となり、その他を除いた4つの方向に分類された。1つ目は「内容の細分化」で恋愛関係特有の現象や感情、行動に焦点を当てた方向であり、恋愛関係を経験することによる影響や、交際中の感情などが見られた。2つ目は「対象の時間的拡大」で恋愛関係に至る前の対象選択の時点や、関係崩壊に焦点が当てられた方向である。3つ目は「恋愛の捉え方の多様化」で、ストーカー被害の実態調査と恋愛関係で生じる問題状況などの恋愛関係における否定的側面に焦点を当てた方向である。4つ目は「恋愛関係の相対的理解」で、恋愛関係を親子関係や友人関係との比較や影響を検討し、それぞれの特徴に焦点を当てた方向である。

高坂（2016）は恋愛研究の課題として3点指摘している。1つ目は立脇ら（2005）と同様に、大学生を対象とした質問紙調査の研究に偏っていることである。2つ目は海外の知見が無批判に取り入れられており、日本における恋愛の独自性に着目した研究の少なさを指摘している。3つ目は恋人の定義を明確にしていない研究が多いという問題である。日本における恋愛研究の動向を調査した研究に対する課題は、調査方法と対象者の偏りについて繰り返し指摘されているが、そのほかについては各研究者によって捉え方が異なっていると考えられる。

## II. 目的

本研究では2013年4月から2020年3月まで

の恋愛研究をレビューし、その動向を整理するとともに、繰り返し指摘されている調査方法と対象者の偏りについて確認を行う。さらに、恋愛状況が多様化する現代において、恋人をどのように定義してきたかを整理・検討し、日本における恋愛研究の動向と課題を明確にすることを目的とする。その際、より網羅的に検索がなされるよう、高坂（2016）と同様に日本心理学諸学会連合に加盟する学会が発行する学会誌に掲載された論文を対象とする。

### III. 方法

日本心理学諸学会連合に加盟している 56 学会（2021 年 4 月時点）の 2013 年 4 月から 2020 年 3 月の間に刊行された学会誌を対象に、恋愛に関する論文の検索を行った。高坂（2016）が 2004 年 4 月から 2013 年 3 月にかけて調査を行ったため、本研究ではその後を受け、2013 年 4 月からとした。

本研究では、立脇（2005）と高坂（2016）を参考に次の基準を設け、対象とする論文の収集を行った。①タイトルまたはキーワードに「恋愛」、「異性関係」、「恋人」のいずれかが含まれている論文、②初対面の異性の外見を扱った論文のうち、「その異性との交際可能性」を測定している論文、③性行動や性意識に関する論文のうち、「恋人」の有無による行動や意識の違いを検討した論文や、恋愛行動、恋愛意識についても測定している論文。それに加え④「デート DV」や「ストーカー」、「重要な他者」など恋愛に関するワードがタイトルあるいはキーワード含まれており、かつ恋愛について考察されている論文を対象とした。また、高坂（2016）と同様に、原著論文や、資料論文、ショートレポートなどのオリジナル論文以外の論文は収集対象外とした。

論文検索の具体的な方法としては、対象学会のホームページと国立研究開発法人科学技術振興機関（JST）が運営する電子ジャーナルプラットフォーム「J-STAGE」にアクセスし、学会誌のバックナンバーから該当する論文の検索を行った。インターネット上でバックナンバーが確認できない学会誌については、学会誌の原本を確認し論文の収集を行った。表 1 に対象となった学会誌の巻号を示す。

### IV. 結果

#### 分析対象となった論文

収集の基準に基づいて論文を確認していった結果、パーソナリティ研究（日本パーソナリティ心理学会）11 本、応用心理学研究（日本応用心理学会）5 本、発達心理学研究（日本発達心理学会）4 本、実験社会心理学研究（日本グループ・ダイナミクス学会）3 本、心理学研究（日本心理学会）3 本、心理臨床学研究（日本心理臨床学会）2 本、青年心理学研究（日本青年心理学会）2 本、学生相談研究（日本学生相談学会）1 本、教育カウンセリング研究（日本教育カウンセリング学会）1 本、社会心理学研究（日本社会心理学会）1 本の合計 33 本が分析対象となった（表 2）。

#### 調査方法と調査対象者

収集された論文 33 本のうち、文献研究を行った 2 本（赤澤、2015；浅野、2015）を除いた 31 本で調査方法と調査対象者のクロス集計表を作成した（表 3）。その結果、大学生を対象とした単回での質問紙調査が 23 本（69.7%）と一番多く、順に大学生から社会人を対象にした質問紙調査 3 本（9.1%）大学生を対象としたペアデータによる質問紙調査 2 本（6.1%）、大学生を対象としたパネル調査、社会人を対象

表1 対象学会とその学会誌と収集対象となる巻号

学会	学会誌	対象となる学会誌の巻号
産業・組織心理学会	産業・組織心理学研究	2013年第26巻第2号～2020年第34巻第1号
日本EMDR学会	EMDR研究	2013年第5巻第1号～2015年第7巻第1号
日本イメージ心理学会	イメージ心理学研究	2013年第11巻第1号～2019年第17巻第1号
日本LD学会	LD研究	2013年第22巻第2号～2020年第29巻第1号
日本応用教育心理学会	応用教育心理学研究	2013年第30巻第1号～2019年第36巻第1号
日本応用心理学会	応用心理学研究	2013年第39巻第1号～2020年第45巻第3号
日本カウンセリング学会	カウンセリング研究	2013年第46巻第1号～2020年第52巻第3号
日本学生相談学会	学生相談研究	2013年第34巻第1号～2020年第40巻第3号
日本家族心理学会	家族心理学研究	2013年第27巻第1号～2019年第33巻第1号
日本学校心理学会	学校心理学研究	2013年第13巻第1号～2019年第19巻第1号
日本感情心理学会	感情心理学研究	2013年第20巻第3号～2020年第27巻第2号
日本基礎心理学会	基礎心理学研究	2013年第32巻第1号～2020年第38巻第2号
日本キャリア・カウンセリング学会	キャリア・カウンセリング研究	2015年第16号第1号～2020年第21巻第1号
日本キャリア教育学会	キャリア教育研究	2013年第32巻第1号～2020年第38巻第2号
日本教育カウンセリング学会	教育カウンセリング研究	2013年第5巻第1号～2020年第10巻第1号
日本教育心理学会	教育心理学研究	2013年第60巻第4号～2020年第68巻第1号
日本教授学習心理学会	教授学習心理学研究	2013年第9巻第1号～2018年第14巻第2号
日本グループ・ダイナミクス学会	実験社会心理学研究	2013年第53巻第1号～2020年第59巻第2号
日本K-ABCアセスメント学会	K-ABCアセスメント研究	2013年第15巻第1号～2020年第21巻第1号
日本健康心理学会	健康心理学研究/Journal of Health Psychology Research*	2013年第26巻第1号～2020年第32巻第2号
日本交通心理学会	交通心理学研究	2013年第29巻第1号～2020年第36巻第1号
日本行動科学学会	行動科学	2013年第52巻第1号～2019年第58巻第1号
日本行動分析学会	行動分析学研究	2013年第28巻第1号～2020年第34巻第2号
日本コミュニティ心理学会	コミュニティ心理学研究	2013年第17巻第1号～2020年第23巻第2号
日本コラージュ療法学会	コラージュ療法学研究	2013年第4巻第1号～2019年第10巻第1号
日本催眠医学心理学会	催眠学研究	2015年第55巻第1,2号～2018年第57巻第1,2号
日本質的心理学会	質的心理学研究	2013年第12巻第1号～2020年第19巻第1号
日本自閉症スペクトラム学会	自閉症スペクトラム研究	2013年第11巻第1号～2020年第17巻第2号
日本社会心理学会	社会心理学研究	2013年第29巻第1号～2020年第35巻第3号
日本自律訓練学会	自律訓練研究	2013年第33巻第1号～2019年第39巻第2号
日本心理学会	心理学研究	2013年第83巻第6号～2020年第90巻第6号
日本心理臨床学会	心理臨床学研究	2013年第31巻第1号～2020年第37巻第6号
日本ストレスマネジメント学会	ストレスマネジメント研究	2013年第10巻第1号～2019年第15巻第2号
日本青年心理学会	青年心理学研究	2013年第25巻第1号～2020年第31巻第2号
日本生理心理学会	生理心理学と精神生理学	2013年第31巻第1号～2019年第37巻第3号
日本動物心理学会	動物心理学研究	2013年第63巻第1号～2020年第69巻第3号
日本特殊教育学会	特殊教育学研究	2013年第51巻第1号～2020年第57巻第4.5号
日本乳幼児医学・心理学会	乳幼児医学・心理学研究	2013年第22巻第1号～2020年第28巻第2号
日本人間性心理学会	人間性心理学研究	2013年第31巻第1号～2020年第37巻第2号
日本認知・行動療法学会	行動療法研究/認知行動療法研究	2013年第39巻第2号～2020年第46巻第1号
日本認知心理学会	認知心理学研究	2013年第11巻第1号～2020年第17巻第2号
日本パーソナリティ心理学会	パーソナリティ研究	2013年第22巻第1号～2020年第28巻第3号
日本バイオフィードバック学会	バイオフィードバック研究	2013年第40巻第1号～2020年第46巻第2号
日本箱庭療法学会	箱庭療法学研究	2013年第25巻第3巻～2020年第32巻第2号
日本発達心理学会	発達心理学研究	2013年第24巻第2号～2020年第29巻第1号
日本犯罪心理学会	犯罪心理学研究	2013年第51巻第1号～2020年第57巻第2号
日本福祉心理学会	福祉心理学研究	2013年第10巻第1号～2019年第16巻第1号
日本ブリーフサイコセラピー学会	ブリーフサイコセラピー研究	2013年第22巻第1号～2020年第28巻第2号
日本マイクロカウンセリング学会	マイクロカウンセリング研究	2014年第9巻第1号
日本森田療法学会	日本森田療法学会雑誌	2013年第24巻第1号～2019年第30巻第2号
日本遊戯療法学会	遊戯療法学研究	2013年第12巻第1号～2020年第18巻第1号
日本リハビリテーション心理学会	リハビリテーション心理学研究	2014年第40巻第1号～2019年第45巻第1号
日本理論心理学会	理論心理学研究	2013年第14,15巻合併巻～2017年第18巻
日本臨床心理学会	臨床心理学研究	2014年第15巻第1号～2020年第57巻第2号
日本臨床動作学会	臨床動作学研究	2013年第18巻第1号～2020年第24巻第1号
包括システムによる日本ロールシャッハ学会	包括システムによる日本ロールシャッハ学会誌	2013年第17巻第1号～2019年第23巻第1号

\*調査期間内に学会誌名が変更していたものは、前身誌名/後続誌名で示した。

表2 学会誌と論文数について

雑誌名	論文数
パーソナリティ研究	11
応用心理学研究	5
発達心理学研究	4
実験社会心理学研究	3
心理学研究	3
心理臨床学研究	2
青年心理学研究	2
学生相談研究	1
教育カウンセリング研究	1
社会心理学研究	1
合計	33

にしたインタビュー調査、高校生を対象とした効果検証は共に1本(3.0%)であった。

### 研究内容の分類

収集対象となった全33本の論文を、どのような現象について検討を行っているのかに焦点を当て、KJ法を援用して分析を行った。分析では、まず筆者が分類を行った後、筆者を含め、臨床心理学部の教員1名、臨床心理学を専攻する大学院生4名の計6名で討議し、内容の検討

と修正を行った。その結果、6つのカテゴリーに分類された(表3)。

1つ目は「恋愛における感情体験や認知」で主に恋愛において体験される感情や出来事の認知について検討したカテゴリーであり、8本の論文がある。その中でも嫉妬や怒り、不安といったネガティブな感情について5本の論文が見られ、カテゴリーの半分以上を占めていた。嫉妬については、嫉妬感情時のコミュニケーション反応(和田, 2015)、多次元的嫉妬尺度の作成(神野, 2016)、嫉妬における自己愛と自尊心の関連(神野, 2018)について検討が行われていた。怒りについては、上原ら(2019)が怒りの表出と関係の継続との関連について生存時間分析<sup>1)</sup>を用いて検討していた。また、宮崎ら(2017)は交換不安<sup>2)</sup>について、上方比較経験<sup>3)</sup>と関係流動性<sup>4)</sup>の交互作用の検討を行っている。ネガティブな感情以外では、現在進行中の恋愛関係の感情や状態を測定する恋愛様相尺度の作成(高坂・小塩, 2015)、violationの認知に行動期待が与える影響(長峯・外山, 2018)、自傷行為をする人と交際するうえで体験する心理的プロセス(西坂, 2018)について検討が行われていた。

2つ目は「恋愛の病理的事象」で主に恋愛関

表3 調査方法と調査対象者のクロス集計表

	高校生	大学生	大学生～社会人	社会人
質問紙(通常)	-	23(69.7%)	3(9.1%)	-
質問紙(ペア調査)*	-	2(6.1%)	-	-
質問紙(パネル調査)**	-	1(3.0%)	-	-
インタビュー調査	-	-	-	1(3.0%)
効果検証	1(3.0%)	-	-	-

\*カップルのペアデータを収集し、分析を行う調査方法。

\*\*同一の調査協力者に対し、期間において同一の質問を繰り返す調査方法。

※尺度の安定性を図るために再テスト法を用いた研究は質問紙(通常)に含めた。

※文献研究2本はクロス集計表から除外した。

表4 対象論文の分類結果

	カテゴリー		論文
恋愛における感情体験や認知 (8)	ネガティブな感情 (5)	嫉妬 (3)	和田 (2015), 神野 (2016; 2018)
		怒り (1)	上原ら (2019)
		交換不安 (1)	宮崎ら (2017)
		恋愛様相 (1)	高坂・小塩 (2015)
		violation認知 (1)	長峯・外山 (2018)
	心理的プロセス (1)		西坂 (2018)
恋愛の病理的事象 (8)	デートDV (4)		笹竹 (2014; 2015), 赤澤 (2015), 松野 (2017)
		恋人支配行動 (3)	片岡・園田 (2014; 2016a; 2016b)
		ストーカー的行為 (1)	金政ら (2018)
関係の継続性に関する事象 (7)	接近・回避コミットメント (4)		古村 (2014; 2016; 2017a; 2017b)
		性的な事象 (2)	和田 (2019)
		浮気 (1)	高坂・澤村 (2017)
		セックス (1)	中井 (2020)
	動機づけ (1)		高坂 (2018a; 2018b)
他の人間関係との比較 (5)	恋人を欲しいと思わない青年 (2)		川本 (2015)
		アイデンティティ (1)	山田ら (2015)
		関係流動性と親密性 (1)	河野ら (2015)
		接触回避 (1)	中山ら (2017), 古村ら (2019)
恋愛による影響 (4)	関係崩壊後 (2)		相羽 (2017)
		問題状況 (1)	大久保 (2018)
		自分磨き (1)	浅野 (2015)
関係研究の方法論 (1)			

※カテゴリーの( )内は該当した論文数を示す。

係の中で臨床的な問題として取り上げられている事象について検討した論文8本がある。具体的には、デートDVについての論文は4本収集された(笹竹, 2014; 2015; 赤澤, 2015; 松野, 2017)。大学生の心理的デートDVの被害経験と被害の認識(笹竹, 2014)、女子高校生に対する心理的デートDVの防止講座の効果検証(笹竹, 2015)、親密性に関する諸理論とジェンダーの神話から文献研究(赤澤, 2015)、個人におけるデートDVの被害・加害経験(松野, 2017)について検討がなされていた。片岡・園田(2014; 2016a; 2016b)は臨床的問題として発展する可能性のある恋人支配行動について継続的に研究を行っていた。片岡・園田(2014)は恋人分離不安尺度の作成と恋人支配行動尺度の作成を行った。恋人支配行動尺度を用いて、分離不安を媒介変数に自己犠牲と未熟性の恋人支配行動への影響の検討(片岡・園田, 2016a)、恋人支配行動が恋愛関係に与える影響

(片岡・園田, 2016b)について検討されていた。金政ら(2018)は関係破綻後のストーカー的行為のリスク要因として、交際時の関係性の認知を測定する尺度と、関係破綻後の思考や感情を測定する尺度を作成し、男女差と愛着不安との関連を検討していた。

3つ目は「関係の継続性に関する事象」で恋愛関係の継続に関連すると考えられる概念や事象について検討を行ったカテゴリーであり、7本の論文がある。具体的には、接近・回避コミットメント(古村, 2014; 2016; 2017a; 2017b)、性的な事象に関する研究として、浮気に対する態度(和田, 2019)と恋人との性行為(高坂・澤村, 2017)について、恋愛関係への動機づけと信頼感の親密性との関連(中井, 2020)、が見られた。古村(2014)は接近・回避コミットメント尺度を作成した後、感情経験と精神的健康との関連(古村, 2016)、ペアデータをを用いて接近・回避コミットメントが感情経験に与え

る影響（古村，2017a）、投資モデルとの関連（2017b）について検討を行った。性的な事象について、和田（2019）は異性間恋愛関係における浮気行動、高坂・澤村（2017）は恋人とセックスする理由とその満足度と関係満足度との関連について検討を行った。動機づけについて、中井（2020）は恋愛関係の動機づけ尺度と恋人に対する信頼感尺度の作成を行った。

4つ目は「他の人間関係との比較」で恋愛関係の特徴を他の人間関係や文化圏などと比較検討を行ったカテゴリーで、5本の論文がある。具体的には、高坂（2018a；2018b）は恋愛経験者と恋人を欲しいと思わない者のコミュニケーションに対する自信の比較や、一年後の恋愛状況の変化について検討を行った。他には、川本（2015）は成人形成期におけるアイデンティティに関連する養育者・友人・恋人へのアタッチメント・スタイルの違いについて、山田ら（2015）は関係流動性と親密性の日本とカナダの国際比較について、河野ら（2015）は恋愛対象者・同性友人・異性友人における接触回避の比較について検討を行っていた。

5つ目は「恋愛による影響」で恋愛を経験することによってもたらされる事象や、心理的な状態、変化について検討したカテゴリーであり、4本の論文がある。恋愛関係の崩壊後について、中山ら（2017）は失恋の形態とアタッチメント・スタイルによるストレス関連成長との関連について、古村ら（2019）は恋愛関係崩壊後のアタッチメント欲求の反応段階の移行について検討していた。他には、相羽（2017）は交際前・交際中・交際後それぞれの問題状況について、大久保（2018）はアタッチメントのケアギビングと自分磨きの相互影響性について検討を行っていた。

6つ目は「関係研究の方法論」で1本の論文がある。浅野（2015）は発達心理学と社会心理

学・パーソナリティ心理学間での知見の分断を指摘し、発達心理学の時系列的視点と社会心理学・パーソナリティ心理学の横断的かつダイアドレベルの階層的視点を組み合わせた統合的アプローチの提案し、構造方程式モデリングの利用可能性について指摘している。

### 恋人・恋愛対象者の定義

恋人・恋愛対象者の定義がなされていた論文は、33本中4本（恋人の定義は高坂・小塩，2015；高坂，2018；中井，2020の3本、恋愛対象者の定義は河野ら，2015の1本）であった。恋人の定義はいずれも「“相手との同意のもとで親密に交際している、実際に接触・交流できる異性”とし、片思いの相手や、芸能人、インターネットやSNS上だけで交流をしている異性や、アニメ、マンガ・ゲームなどのキャラクター、および同性は、恋人に含めなかった」（高坂，2013；高坂・小塩，2015）とされていた。

恋愛対象者の定義は「交際中の異性が現在いる場合はその交際相手を、交際相手が現在いない場合は最近まで愛していた人を、これまで異性を愛したことがない場合は、恋愛に近いくらいに親しくなった異性人物のこと」（河野ら，2015）とされていた。恋人・恋愛対象者の定義のいずれもが異性愛に限定していた。

また、調査対象者を異性愛と限定していた論文は33本中11本であった。そのうち2本は異性愛と限定していなかったものの、分析では男女ペアのデータを分析に用いていた。また、異性愛と限定していなかった論文22本のうち、3本の質問項目に「異性の～」と記載されていた。

## V. 考察

本研究では、これまでの恋愛研究で指摘されてきた課題について整理し、現代の恋愛研究の

動向と課題を検討すべく、2013年4月から2020年3月までに心理学諸学会連合に加盟する56学会の学会誌に掲載された論文を収集した。その結果、33本の論文が分析対象となり、KJ法を用いて分析したところ、6つのカテゴリーに分類された。以下にそれぞれの結果に対する考察を述べる。

### 調査方法と調査対象者

本研究においても、立脇ら(2005)・高坂(2016)が指摘するように、文献研究を除いた31本の論文のうち23本(69.7%)が大学生を対象に質問紙調査を行っており、調査方法と対象者の偏りは依然として変わらないと考えられる。さらに、高坂(2016)は質問紙のペア調査とパネル調査の増加を指摘したが、本研究の結果を踏まえると、増加しているとは一概には言えない。今後はこれまで質問紙調査によって明らかにされた知見を、実験法によるカップルの相互作用や因果関係の検討、インタビュー調査による個人差のより詳細な検討を行う必要があるだろう。

### 研究内容の分類

収集対象となった全33本の論文を、どのような現象を対象に検討を行っているのかに焦点を当てKJ法を援用して分析した結果、6つのカテゴリー(「恋愛における感情体験や認知」、「恋愛の病理的事象」、「関係の継続に関する事象」、「恋愛による影響」、「他の人間関係との比較」、「関係研究の方法論」)に分類された。

「恋愛関係における感情体験や認知」は、立脇ら(2005)における「恋愛相手や恋愛関係に対する感情や評価」と概ね一致すると考えられる。立脇ら(2005)と本研究の結果を比較すると、愛情や好意と言ったポジティブな感情よりも、嫉妬や怒り、不安などのネガティブな感情

について関心が向けられていると考えられる。恋愛関係は親密であるが故にポジティブな感情だけでなく、ネガティブな感情も同等に体験する。そのため、恋愛関係の実態把握のみならず、臨床的な問題へと発展することを未然に防ぐために有用であると考えられる。

「恋愛の病理的側面」は、デートDVや恋人支配行動といった臨床上の問題へと発展しうる事象について検討しているカテゴリーである。立脇・松井(2014)はデートDVに関する論文が多かったため除外していたが、高坂(2016)はデートDVやストーカーに関する学術誌論文が1本もみられなかったと指摘している。本研究ではデートDVについては4本、ストーカー的行為については1本の論文が収集された。また、相羽(2017)は交際前・交際中・交際後に大学生が直面する問題について検討している。これらのことから、ここ数年の間で日本における恋愛研究では、恋愛関係の病理的な側面や悩みについて学術誌論文レベルで関心が高まっていることが考えられる。

「関係の継続に関する事象」は恋愛関係の継続に関連すると考えられる事象から構成されている。中でも古村(2014;2016;2017a;2017b)は継続的に接近・回避コミットメントについて研究を行っていた。恋愛関係を積極的に維持しようとする接近コミットメントと、関係崩壊によってもたらされる負担を回避するために関係を続けようとする回避コミットメントの2つの側面から捉えようとする試みには、恋愛関係をより詳細に検討していくうえで有効な概念だと考えられる。

「他の人間関係との比較」は立脇ら(2005)における「恋愛と関連する要因」の「恋人以外の人間関係」、高坂(2016)における「他の人間関係の中に位置づける方向(恋愛関係の相対的理解)」と一致すると考えられる。恋愛関係

を親子関係や友人関係などの他の関係と相対的に理解しようと試みる研究は、1980年代から現代でも継続して行われていると考えられる。

「恋愛による影響」は高坂（2016）におけるカテゴリー「恋愛関係の影響」と概ね一致すると考えられる。「関係崩壊後」について、高坂（2016）は「対象の時間的拡大」に割り振られていた。本研究では恋人選択に関する研究が見られなかったため、恋愛関係を経験することによってもたらされうる体験として関係崩壊があると考えられたため、「恋愛による影響」に分類した。「恋愛による影響」は関係崩壊後や問題状況といったストレスフルな状況との関連を検討した研究が半数を超えるが、自分磨き（大久保、2018）といったポジティブな影響についても検討されていた。

「関係研究の方法論」は浅野（2015）の1本のみであった。立脇ら（2005）と高坂（2016）と比較すると、一致する分類はみられなかった。これは浅野（2015）が特集・依頼論文であったからということが大きく影響していると考えられる。

### 恋人・恋愛対象者の定義

本調査で収集対象となった33本の論文のうち、恋人・恋愛対象者の定義が明確になされていたのは4本であった。そのうち3本は同様の定義（高坂、2013；高坂、小塩、2015）が用いられていた。恋人・恋愛対象者の定義の不明確さについては高坂（2016）も指摘しており、定義の問題については現在も積み残されたままであると考えられる。

また、33本の論文のうち11本は対象を異性愛と限定していたことや、限定していない論文21本のうち3本は質問項目に「異性の～」と記載されていた。このことから、論文によっては異性愛と同性愛を区別する立場と区別しない

立場があることがうかがえる。区別をしない立場の中には、同性愛者が調査対象者の中に含まれる可能性を考慮していない可能性もある。このことから、現状では異性愛と同性愛といった性愛の対象による違いは、あまり明確にされていないと考えられる。今後、異性愛と同性愛ではどのような点が異なるのか、あるいは変わらないのかを検討していく必要があるだろう。

### 本研究の意義と課題

本研究ではこれまで先行研究で指摘されてきた課題を整理し、その課題がどれほど達成されているのかについて検討を行った。その中で、これまで積み残されてきた課題が依然として取り組まれていないことを指摘するだけでなく、異性愛と同性愛の相違について近年の恋愛研究において不明瞭さがあることを明らかにしており、十分に意義があったと考えられる。

また、本研究の結果、ここ数年における日本の恋愛研究では、恋愛のポジティブな側面よりも、ネガティブな感情体験や病理的な事象に関心が向けられている点を明らかとしたことも意義がある。これは恋愛によってもたらされるネガティブな体験を、存在してはいけないものとしてではなく、その苦しみがどのような体験であり、いかにして乗り越えていくのか取り組んでいこうとする姿勢のあらわれなのではないだろうか。

本研究の課題としては、まず1つは56の学会の学術誌を収集対象としたが、教育機関が発刊する紀要などを対象としなかった。そのため、日本における恋愛研究をすべて網羅した研究であるとは言い難い。例えば、原口・竹鼻（2019）は大学生のマッチングサービス・アプリの利用状況について調査を行っており、現代の流行りや関心を検討したと考えられる研究が存在する。資料の手に入りにくさといった困難はある

ものの、紀要や大会発表論文集からも収集・検討を行った方がより時代の流れを適切に捉えられるかもしれない。

また、本研究における研究内容の分類は検討されている現象に焦点を当てて分類を行った。そのため、どのような理論を用いて検討が行われているかについては明らかにできていない。例えば、本研究で収集された33本の論文のうち、4本(川本, 2015; 中山ら, 2017; 大久保, 2018; 古村ら, 2019)はアタッチメント理論を用いてそれぞれの事象を検討していた。このように、どういった理論から現象を捉えようとしているかといった視点が本研究では掘り上げられていない可能性がある。

## 注

- 1) 生存時間分析: 出来事が起きるまでの時間と出来事との関係に焦点を当てた分析方法のこと。
- 2) 交換不安: 相手が自分以外の対象に関心を持つことによって、その対象と自分が交換されてしまうのではないかという不安。
- 3) 上方比較経験: 自分と周囲の他者の能力や価値を比較した際、自分よりもその他者を価値のある人物として認知すること。
- 4) 関係流動性: その環境における対人関係の選択肢の多さについての指標。関係流動性が高い環境は、対人関係の選択肢が多く、関係流動性の低い環境は選択肢が少ない。

## 文献

- 相羽美幸 (2017). 大学生の恋愛における問題状況の構造的枠組みの構築. 応用心理学研究, **42** (3), 234-246.
- 赤澤淳子 (2015). 親密な二者関係のダークサイドとしてのデートDV. 発達心理学研究, **26** (4), 288-299.
- 浅野良輔 (2015). 時系列と階層性の視座に基づく親密な関係研究: 発達心理学と社会心理学による統合的アプローチ. 発達心理学研究, **26** (4), 267-278.
- 原口伶泉・竹鼻ゆかり (2019). マッチングサービス・アプリの大学生の利用実態と影響要因. 東京学

- 芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系, **71**, 151-162.
- 古畑和孝 (1990). "愛"の特集号の編集にあたって—愛の心理学への序説—. 心理学評論, **33** (3), 257-272.
- 金政祐司・荒井崇司・島田貴仁・石田仁・山本功 (2018). 親密な関係破綻後のストーカー的行為のリスク要因に関する尺度作成とその予測力. 心理学研究, **89** (2), 160-170.
- 神野雄 (2016). 多次元的恋愛関係嫉妬尺度の作成と信頼性・妥当性の検討. パーソナリティ研究, **25** (1), 86-88.
- 神野雄 (2018). 青年の恋愛関係における嫉妬傾向は自尊感情に規定されるか—自己愛的観点からの検討. パーソナリティ研究, **27** (2), 125-139.
- 片岡祥・園田直子 (2014). 恋人への分離不安と愛情及び交際期間が恋人支配行動に及ぼす影響. パーソナリティ研究, **23** (1), 13-28.
- 片岡祥・園田直子 (2016a). 2つの恋人支配行動の生起メカニズムの違い. 応用心理学研究, **42** (1), 40-47.
- 片岡祥・園田直子 (2016b). 恋人支配行動が恋愛関係の良好さに及ぼす影響. 応用心理学研究, **42** (2), 130-139.
- 川本哲也 (2015). 成人形成期のアイデンティティと複数の社会的関係性の関連: 養育者・友人・恋人に対するアタッチメント・スタイルの違いに着目して. 発達心理学研究, **26** (3), 210-224.
- 河野和明・羽成隆司・伊藤君男 (2015). 恋愛対象者に対する接触回避. パーソナリティ研究, **24** (2), 95-101.
- 古村健太郎 (2014). 恋愛関係における接近・回避コミットメント尺度の作成. パーソナリティ研究, **22** (3), 199-212.
- 古村健太郎 (2016). 恋愛関係における接近・回避コミットメントと感情経験, 精神的健康の関連. 心理学研究, **86** (6), 524-534.
- 古村健太郎 (2017a). 接近・回避コミットメントが恋愛関係における感情経験に与える影響—行為者—パートナー相互依存性調整モデル (APIMoM) による検討—. 実験社会心理学研究, **56** (2), 195-206.
- 古村健太郎 (2017b). 恋愛関係における接近・回避コミットメントと投資モデルの関連. パーソナ

- リティ研究, 25 (3), 240-243.
- 古村健太郎・戸田弘二・村上達也・城間益里 (2019). 元恋人へのアタッチメント欲求が関係崩壊後の反応段階の移行を遅らせる. 心理学研究, 90 (3), 231-241.
- 高坂康雅 (2011). “恋人を欲しいと思わない青年”の心理的特徴の検討. 青年心理学研究, 23, 147-158.
- 高坂康雅 (2016). 日本における心理学的恋愛研究の動向と展望. 和光大学現代人間学部紀要, 9, 5-17.
- 高坂康雅 (2018a). 青年期・成人期前期における恋人を欲しいと思わない者のコミュニケーションに対する自信と同性友人関係. 青年心理学研究, 29, 107-121.
- 高坂康雅 (2018b). 恋人を欲しいと思わない大学生の1年後の恋愛状況の変化—恋人を欲しいと思わない理由と恋人を欲しいと思うようになった理由に着目して. パーソナリティ研究, 27 (1), 90-93.
- 高坂康雅・小塩真司 (2015). 恋愛様相尺度の作成と信頼性・妥当性の検討. 発達心理学研究, 26 (3), 225-236.
- 高坂康雅・澤村いのり (2017). 大学生が恋人とセックス (性行為) をする理由とセックス (性行為) 満足度・関係満足度との関連. 青年心理学研究, 29, 29-42.
- 松井豊 (1990). 青年の恋愛行動の構造. 心理学評論, 33 (3), 355-370.
- 松野真 (2017). デートDVにおける加害・被害経験タイプと加害者の特性. 教育カウンセリング研究, 8 (1), 1-11.
- 宮崎弦太・矢田尚也・池上知子・佐伯大輔 (2017). 上方比較経験と関係流動性が親密な二者関係における交換不安に及ぼす影響. 社会心理学研究, 33 (2), 61-72.
- 長峯聖人・外山美樹 (2018). 親密な他者に対する行動予期が violation の認知に及ぼす影響の検討—violation の認知による心理的影響を踏まえて. パーソナリティ研究, 26 (3), 229-243.
- 中井大介 (2020). 恋愛関係への動機づけと恋人に対する信頼感および親密性の関連. パーソナリティ研究, 29 (2), 78-90.
- 中山真・橋本剛・吉田俊和 (2017). 恋愛関係の崩壊によるストレス関連成長—愛着スタイルおよび崩壊形態の関連. パーソナリティ研究, 26 (1), 61-75.
- 西坂恵理子 (2018). 人が自傷者と交際するうえで体験する心理的プロセスの生成—重要な他者を対象とした探索的研究. 心理臨床学研究, 36 (2), 154-165.
- 大久保圭介 (2018). 恋愛関係における自分磨きに対するアタッチメントとケアギビングの相互影響性. パーソナリティ研究, 27 (1), 64-72.
- 笹竹英穂 (2014). 大学生の心理的デートDVの被害経験の実態および被害の認識の性差. 学生相談研究, 35, 56-69.
- 笹竹英穂 (2015). 女子高生を対象とした心理的デートDVの防止講座の効果検証—シングルセッションの場合. 心理臨床学研究, 33 (5), 41-450.
- 立脇洋介・松井豊・比嘉さやか (2005). 日本における恋愛研究の動向. 筑波大学心理学研究, 29, 71-87.
- 立脇洋介・松井豊 (2014). 恋愛—平井典子・稲垣佳世子・河合優年・斎藤こずゑ・高橋恵子・山祐嗣 (編) 児童心理学の進歩 2014年版 53巻. 金子書房, 95-119.
- 上原俊介・森丈弓・中川知宏 (2019). 親密な関係における怒りの感情表出と効果: 生存時間分析による検討. 実験社会心理学研究, 59 (1), 25-36.
- 和田実 (2015). 恋愛関係嫉妬時の情動とコミュニケーション反応—嫉妬の強さおよび生徒の関連—. 応用心理学研究, 40 (3), 213-223.
- 和田実 (2019). 現代青年の異性間恋愛関係における浮気—性, 浮気および恋愛に対する態度, 浮気願望との関連—. 応用心理学研究, 44 (3), 171-182.
- 山田順子・鬼頭美江・結城雅樹 (2015). 友人・恋愛関係における関係流動性と親密性—日加比較による検討—. 実験社会心理学研究, 55 (1), 18-27.
- 若尾良徳 (2014). 恋愛に関する心理学研究の展望—異性交際から疎外された若者へのライフコースからのアプローチ—. 浜松学院大学研究論集, 10, 59-77.
- (青山 巧、京都文教大学大学院 臨床心理学研究科 博士後期課程 D2)

*Abstract*

## The Trends and Problems of Research into Romantic Relationships

Takumi AOYAMA

Today, we see a diversification in the attitudes toward and circumstances of romantic relationships, as seen in the variety of gender identities and sexual orientations, and changes to the ways people meet due to the emergence of dating apps. However, there are few psychological studies focused on romantic relationships.

This study aims to investigate the trends and problems of research into romantic relationships in Japan, focusing on the nature of the subjects of research, research participants, research methods and the definition of a romantic partner. In line with previous studies, the scope of research materials was limited to papers on romantic relationships published in academic journals between April 2013 and March 2020 by 56 academic associations that are members of the Japanese Union of Psychological Associations (as of April 2021).

Based on our criteria, we found a total of 33 studies for analysis. Using the KJ method, we conducted analysis on what kind of phenomena were the subject of research. Studies were then classified into six categories: emotional experience and cognition; pathological phenomena; phenomena related to relationship continuity; comparison with other relationships; effects; and relationship research methodology. Romantic relationship research conducted in Japan in recent years is said to have been more focused on negative emotional experiences such as jealousy, anger, anxiety, and so on, in addition to pathological phenomena such as domestic violence, stalking and controlling behavior.

When focusing on survey participants and survey methods, we found that, excluding two reviews, 23 of 31 studies (69.7% ) conducted questionnaire surveys on university students. This suggests a persistent bias in terms of survey participants and methods. Of the 33 studies, 11 researches restricted their survey participants to heterosexuals. Out of which, only four defined the nature of a romantic partner, and all focused on heterosexuals.

Key words : Review, Romantic love, Definition of romantic partner